

實踐倫理

宋名臣言行錄

野木將典

# 本文

紙幅の都合で原文を省略する

## 寇こう 準じゅん

御衣をとらえて離さず

悪政のもと災害あり

俗僚どもの緊張

見幕は当るべからず

宰相のひげを拭うもの

宰相らしい宰相

人生いずれの処にか逢わざらん

下邳かげい（陝西省華州）の人。字は平仲、諡は忠愍ちゅうびん。太宗の大平興国四年（九七九年）、一九歳で進士に及第した。大理評事、成安（河南省）の知をふり出しに、枢密院直学士にいたる。太宗これを愛して、唐の名臣。魏徴ぎしやうに比した。眞宗の時、同中書門下平章事（宰相）となる。遼軍の侵入にさいし、動揺する衆議を圧えて、帝の親征を請い、瀋州で大勝を博した。王欽若おうきんじやくの謀略にかかり宰相をやめたが、天禧てんきの勸め再び宰相に復活した。性、剛直で、政敵と激しい政争をくりかえし、丁謂ていゐの構えるところとなり、雷州（広東省）の司戸參軍に流され、さらに衡州こう（湖南省）の司島に移って没した。封は来国公。著書に『巴東集』がある。

九六一年——一〇三三年。享年六十三。

### ○ 御衣をとらえて離さず

太宗の時代、寇準は員外郎であった。(員外郎というのは、もとは正員のほかに置かれた者の稱であったが、後には各部に一人ずつ置いて、役所内の籍帳を司らしめ、正官となった。その位は郎中の次であった。寇準の場合は、刑部の員外郎で枢密直学士であった。いわば天子の秘書官である。)

その寇準が、ある事を上奏して、太宗の意にさからう方針を述べたことがあった。太宗は腹を立てて、さっと立て内廷へ退出しようとした。すると寇準は、太宗の御衣をとって離さず、玉座にお戻り願った。そして再び自説を述べ立てて、裁可を得てから退出した。このような寇準を、太宗はかえって大いに気に入って、

「わしが寇準を手に入れたのは、唐の太宗が魏徵(字は玄成。官は諫議大夫に至り、鄭国公に封ぜられた)を手に入れたのに匹敵する」

と語った。

### ○ 悪政のもと災害あり

太宗の時代、ある年、天下は大旱魃かんぱつに襲われた。太宗は大いに心配して、宮中にある学士の詰所に立ち寄り、その

対策を広く咨問した。学士どもは、

「水害とか旱魃とかは、天災でありますから、堯ぎょう、湯とうのような聖人でも、どうすることもできません」といった。ところが寇準は、ひとり進み出て云った。

「政治がわるく朝廷の刑罰が公正を欠きましたので、大災害が起こったのであります」

太宗は不快の感をもよおし、怒って内廷へ入ってしまった。しかし、しばらくして冷静にかえり、寇準を召して、さっきの説明を求めた。寇準はいった。

「それでは、中書省と枢密院（刑罰を司る）の長官をお召し下さい。その前で申し上げます」

太宗が、寇準の要求どおり兩名を召し寄せると、寇準はいった。

「某ななしの子で甲という者は、賄賂を少しばかり取ったばかりに、死罪に処せられています。ところが、参政知事（副宰相）の王洵ぎゅうじゆんの弟・淮わいは、彼が管理するところの財貨を、一千万以上も盗んだのに、死罪を免れています。これが偏破でなくて何んでありますしょう」

太宗は王洵ぎゅうじゆんを召し寄せ、その通りかどうか問うた。王洵ぎゅうじゆんは、頭を下げて、太宗にわびた。太宗は王洵ぎゅうじゆんと彼の弟を罷免した。

かくて年の暮には大いに雨が降り、五穀をうるおした。太宗は大いに喜び、寇準の人材なるを知り、彼を速かに重用した。

## ○ 俗僚どもの緊張

寇準は、人となり誠実で、作為さくゐがなかった。齒きまに衣きぬきせず物を言いって、遠慮えんりょすることがなかった。当時の人々は、寇準についてこのように語った。

「寇準が朝廷へ出勤すると、俗僚どもは身がひきしまり、畏れて足がふるえた」と。

## ○ 見幕は当たるべからず

(眞宗の初年、契丹——遼——が宋の地深く侵入してきた。宰相の寇準は主戦論をとって北伐した。契丹軍は亶州たんしゅう(河北省開州)に達したが、宋軍の抵抗にあつて攻めあぐんだ。)契丹は兵を撤退させて、和睦を持ちかけてきた。眞宗は、契丹の事情にくわしい曹利用そうりゆうを使者として交渉におもむかせた。

当時、契丹軍は兵の疲労がひどく、宋の大軍に包圍されて退路を断たれることを何よりも恐れていた。そこへ曹利用がやって来たので大いに喜び、曹利用を歓待して、珠たまの縁飾かりりのついた貂ちようのしとねなどを、彼の宿所に用意した。

契丹の王(遼の聖宗)は、講和の条件として、河北の地(十六州)の割讓を要求した。曹利用はいかに何でもそれは大き過ぎると考え、

「その条件をのめば、わたくしは一族皆殺しの罪に問われます。とても上聞するわけにはいきません」

と拒否し、その代わり貢物として毎年、金帛二十万を贈ることを出させた。契丹側は、それでは少な過ぎるといつて難色を示した。曹利用は戻って、この旨を眞宗に奏上すると、眞宗は、

「百万までなら仕方があるまい」

と裁下した。

この後で寇準は曹利用を呼んで、こう申し渡した。

「陛下は百万までは出してもいいと言われたが、かならず三十万以内でまとめるのだぞ。おまえが譲歩して三十万を超えたなら、わしはお前を許してはおかぬ。斬って捨てるからそのつもりでおれ」

曹利用は、がたがた震えながらうなずいた。こうして再び契丹の陣営におもむき、ついに三十万（銀二十万両と絹二十万匹）の支給額で講和をまとめてきた。

## ○ 宰相のひげを拭うもの

寇準は人材を愛し、彼らを育て、起用することの喜びを感じていた。种放ちゅうほう（字は名逸、官は左司諫にいたる）、丁謂ていゐ（字は公言）は、彼の中から出たのである。丁謂の人物については、彼は親しい者に、

「あの男は奇才であるが、重任には堪えられない」

と洩らしたことがある。寇準が宰相になると、丁謂は執政に取り立てられた。あるとき宰相の執務室で会食したさい、寇準のひげが汁でぬれた。丁謂は直ぐに立って、寇準のひげをぬぐった。寇準は、きつとなって、

「君は一回の執政ではないか。なにも人のひげをぬぐう必要はない」

といった。丁謂は、恥ずかしさで、居たたまれなかった。このように寇準は、いつでも正論を吐いて、相手の腹悪さなど意に介しなかった。そのため遂に丁謂からも憎まれ、陥れられて、南支の雷州に逐われて客死した。

## ○ 宰相らしい宰相

張詠（字は復元、諡は忠定）が、蜀の大守であった時、寇準が宰相に任ぜられたと聞いて、

「寇準は宰相らしい宰相だ」

と、つぶやいた。そして又、

「しかし人民は、その徳沢をこうむることができない」

とも言った。門人の李暎が、その言葉の矛盾しているのを怪しみ、わけを尋ねると、

「普通の人々が千言を費しても云いつくせぬことを、寇準ならば一言をもって核心をつく。しかしながら、仕出していくらも経たないのに、急速に取り立てられたから、学問修業するいとまがなかった。だから長く宰相の地位を保つことができまい」

といった。

張詠と寇準とは、出仕しない前から親交があった。そして張詠は、寇準に兄事していた。張詠は、面と向かって寇準に忠告でき、すこしも遠慮しないでいい仲であった。出仕してからも、この態度は少しも変らなかつた。張詠が陝

西省の鳳翔府ほうしょうに在った時、寇準が蜀しやくからの歸途に立ち寄ったが、ゆっくりしている暇がなく、そさくさと別れた。このとき張詠が、

「霍光かくこう（漢・平陽の人。字は子孟、諡は宣成）の伝記を読んだことがあるか」

と聞いた。寇準が、

「まだ読んでいない」

というと、張詠は後は何も言わなかった。

寇準が都へ帰って、このことを思い出し、霍光の伝記（『漢書かんじよ』霍光伝）を取り出して読んでみると、霍光は学問がないため牛腕を欠き大理に暗いと書いてあった。寇準は笑って、

「張詠が読めといったのは、ここのことろだな。これはわしのことを言っているのだ」といった。

## ○ 人生いずれの処にか逢わざらん

寇準が雷州らいしゆ（広東省雷州半島、広州湾に臨む）に流される時、丁謂ていゐと馮拯ほうしんの二人が内客にあって、どこへ流罪にするか決めた。丁謂は、はじめ崖州がいしゆ（広東省瓊山県、海南島にある）に流すつもりであったが、いざ筆をとる段になると、少しためらって、馮拯に向かつて、

「崖州へ行くには、大海原を二度も渡らなければならない。どうしたものか」

と聞いた。馮拯は何も答えず、ただうなずいただけであった。そこで丁謂は、考えをあらためて、雷州に流したのである。

ところが、後に丁謂も失脚して、流罪に処せられることになった。この時は、馮拯はかまわず彼を雷州へ流してしまった。当時の人々は面白がって、こう噂したものである。

「もし雷州で寇準にでも会ったなら、どういうことになるだろうか。人生などというものは、どこで誰とぶつかるか知れたものではない」

丁謂が流刑死へ旅出たところ、寇準は道州（湖南省道州）へ遷されることになった。寇準は、丁謂が左遷されて来たことを知ると、使いの者に蒸した羊を持たせて州境へ出迎えさせた。そして自分は、召使に嚴命して門を閉じさせ、外出するのを禁じた。

この話を聞いた当時の人々は、「それでこそけじめのある、適切な対応のしかた」だと噂であった。

# 范仲淹 はんちゅうえん

論説は仁義にもとづく

胸中に数万の兵あり

大軍一たび動くとき

軍中に范中淹あり

明党の益を論ず

人民全体が泣きを見るよりは

蘇州（江蘇省）の人。字は希文、諡は文正。二歳で父を喪い、母が長山の朱氏に再嫁するに従い、名を説と改めた。が、長ずるに及び母を辞去し、祥符の進士に挙げられ、姓名を故に復した。晏殊に推薦されて秘閣校理となり、毎に天下の事を激論した。仁宗の時、吏部員外郎となったが、呂夷簡にさからい、饒州の知に出された。饒州では陝西を略し、よく羌人きやうじんを服せしめ、羌人は彼を尊敬して董とう図老子と呼んだという。めぐって枢密副使となり、参知政事（執政）に進み、出でて河東陝西宣撫使となり、戸部侍郎に遷った。いわゆる「慶曆けいれきの治」の名臣で、宗代士風の形成に力があつた。卒して兵部尚書を贈られた。

九八九年——一〇五二年。享年六十四

## ○ 仁義にもとづく

范仲淹は、二歳のとき父を失なった。母は、家が貧しく、身を寄せるところもなかったため、常山の朱氏のところへ再嫁した。范仲淹は、長ずるに及び、生家が立派な家からであったことを知り、発憤して母のもとを去り、南都の応天府へ行き、学校に入った。

彼は学業につくや、部屋をきれいに掃き清め、昼となく夜となく勉強にいそしんだ。その居る所の粗末なことや、食べ物のまずしいことは、とうてい他人の耐えられるものではなかったが、それでも彼はみずから励んで、ますます苦学した。在学すること五年にして、ついで六経（儒学の根本的經典）に精通し、文章を著わすさいには、かならず仁義の基本を踏まえていた。

## ○ 胸中に数万の兵あり

范仲淹は、延門えんもんの長官のとき、みずから閲兵をやり、將校に適性者を選んで、日ごろから訓練にはげんだ。また、いつも心がけていたことは、「各方面の責任者に警告を發して、軍事を怠りなく蓄えて、軽々しく敵の挑発に乗らぬようにさせる」ということだった。そこで西夏の蛮族たちは、あい戒めてこう言っていた。

「延州には、うかつに侵入することはできぬ。同じ范氏はんしでも、范仲淹の方は腹中に数万の甲兵を呑んでいる。だまし

やすい范雍はんよう（字は伯純。礼部尚書に至った）とは比べものにならぬぞ」

その頃、西夏せいにかの蛮族たちは、州の長官を老子だんなと呼んでいた。それで、范仲淹はんちゆうえんを小范老子せうはんらうしと呼び、前任者の范雍だいはんを大范老子と呼んでいたのだ。

## ○大軍一たび動くとき

仁宗の時代、西夏の侵寇がしきりで、韓琦が討伐の指揮官に任せられた。韓琦は軍を五方面から出撃させて、敵の本拠地である平夏へいか（甘肅省固原県）を衝こうとした。その頃、范仲淹は延州（陝西省膚施県）の防衛にあたっていた。彼は韓琦の要請があっても、自重して動かなかった。そこで、軍政官の尹洙いんじゆ（字は師魯が命を奉じて、范仲淹の慶州の陣へかけつけ、進撃するように促した。

范仲淹は、応じようとせず、

「わが軍は今だに沈滞している。ここはひたすら守りを固めて、敵の出方をうかがった方がいい。少ない兵力をもって敵地へ深く踏みこむのは危険である。現在の状況からうかがうに、どうも勝ち戦は望めそうもない」

と言った。尹洙は歎息して、

それだから、あなたは韓琦に及ばないのだ。韓琦は、こう言っている。『戦争となれば勝つか負けるかにこだわらず、思いきってぶつかるだけだ』と。ところが、あなたのやり方は、ささいな事に捉われて、慎重であり過ぎる。韓琦の器量に及ばないのは、そのところだ」

と言った。范仲淹は、

「大軍を動かすということは、万人の生命にかかわる問題だ。それなのに、勝負を度外視するなどというのは、わたしは決して適切なことだと思わない」

と、尹洙をたしなめた。尹洙は説得に失敗したので、そさくさと帰って行った。

韓琦の方は、ついに軍を敵の領土に進め、好水川（甘肃省涇原道隆德県）という所に宿営した。ところが西夏の李元昊が、待ち伏せて襲いかかったので、軍は壊滅的な打撃を受け、大將の任福まで討ち取られるといったありさまであった。

韓琦はいのちからがら引き返したが、その途中、戦死した者の家族たち数千人が、馬首にとりすがって泣き叫んだ。てんでんに死者の着ていた服や紙銭（死者と共に埋める銭型にきった紙）をもって、霊を呼び寄せようとし、その声は天地をも震わせるほどだった。韓琦は悲しみと憤りにたえきれず涙を流し、長いことその場に立ちつくすありさまであった。

この話を伝え聞いた范仲淹は、嘆いてつぶやいた。

「これでも、勝ち負けに捉われないというのだろうか」

## ○ 軍中に范仲淹あり

范仲淹は韓琦と力を合わせて、失なった靈夏・横山の地を取り戻そうとはかった。国境に陣を張ると、兵たちは歌っ

て、「わが陣中に韓琦あり、西夏の賊どもはこれを聞き、恐れて膚に汗するだろう。わが陣中に范仲淹あり。賊どもはこれを聞いて、胆を冷やすだろう」と。

この意気ごみに西夏の王・李元昊りげんこうは大いに戦いになじみ、ついに和平を取り結んで、宋の朝廷にたいして臣と稱した。

### ○ 明党の益を論ず

慶暦四年（一〇四四）四月戊戌ぼじゅう（つちのえいぬ）の日、仁宗は明党——政治的党派——の可否について問いただした。この時、執政であった范仲淹は、このように奏上した。

「易よの教えにも、万物はその性質や運動方則によって、それぞれの群を成し、相互にあい関連して作用するとあります。昔から邪なるものと正なるものが、朝廷において対立しあっているのですから、類を求めて党派が形成されないわけはありません。それは抑えきれるものではないのですが、当否の判断は一にかかって陛下にあるのですから、陛下が判断を誤らなければよいわけです。それにしても、君がたがいに党派を結んで、政治をよい方向に押し進めるならば、国家にとって決して害になるものではありません」

（范仲淹はこのようにして、派閥有用論をとなえた。）

## ○ 人民全体が泣きを見るよりは

范仲淹は、参政として韓琦、富弼の二人と並び立ち、国政全般を攝理した。各方面の行政官が有能でないと見ると、杜杞、張温などの若牛を起用した。考課表を作って、有能でない者は、機会を捉えては更送した。富弼は、范仲淹を先輩として立てていたが、たまりかねて言った。

「ご老体のほうでは、一筆しるしをつけただけで済みますが、更送された行政官の家族は、泣きを見ているのを、ご存知ありますまい」

すると范仲淹は、こう答えた。

「いや、一家が泣きを見たところで、一路の人民全体が泣きを見るよりはましだ」  
そして、なおも容赦せず、無能な官吏を、ことごとく淘汰した。

### (注) 一路

「路」とは、宋の行政区劃の最大単位で、太宗のとき全国を十五路に分ち、太宗のとき増して二十四路とした。「路」の中に、府・州・軍・監などがあった。

## ○ 石介を諫官とするを止む

歐陽脩、余靖（字は安道）、蔡襄（字は君謨）、王素（字は仲儀）の四人は、諫官（天子の過を諫める役）の職にあつた。世の人々は、これを四諫といつて、その良吏なるを稱した。この四人が、あるとき石介（字は守道。）なる者を推挙し、諫官の列に加えようとした。執政がこれに従おうとすると、參知政事（副宰相）の職にあつた范仲淹が、ひとり反対していった。

「石介が剛直の人であることは、衆目が一致している。しかし、かど立った性格で好んで異を唱えるくせがある。もし諫官にすれば、必ずや実行不可能なことを、天子に強要するに違いない。かたくなに天子に迫つて、余計なめごとを起こすであらう。天子はお若くて徳を具えており、朝廷の政治も円滑にいつているのに、どうして彼のような者を諫官の職につける必要があるうか」

執政たちは、この意見をもっともだとして

石介の起用は見あわせた。

## ○ 人材なきにあらず

韓琦が、かつてこう話していたことがある。ある時、范仲淹が、呂夷簡（仁宗のとき宰相）と、人材について議論

していた。呂夷簡が、「わしも多くの人物を見てきたが、節操の正しく堅固なものはいないものだ」

というと、范仲淹は、

「いや、天下には人材はあるのだが、貴方が知らないだけのことだ。そのような先人観で人に接していたのでは、人材がやって来ないのは、むしろ当たり前でしょう」

と応じたという。

### ○ われに道義の楽しみあり

范仲淹が抗州に在任していた時、政界引退の意思があると見て、子弟がおりを見て勧めた。

「今のうちに洛陽に邸宅を確保し、庭園をこしらえて、老後に備えられては」

これに対し、范仲淹は答えた。

「わしには道義の実践という楽しみがある以上、身のことなど気にかける必要はない。いわんや住む家のことなど論外だ。すでに六十の坂をこえて、このさきいくら生きられよう。豪邸に住むといったとて、どれほど住んでいられよう。わしが心配なのは、位が高くなり過ぎて、引退の決意がにぶりはしないかということだ。引退してからの家のことなど、どうでもいいことだ」

## ○ 先憂後樂

范仲淹は、年少の頃から大義に明かるく、大節をとって確然としていた。金錢欲とか、地位などとか、個人的感情にはすこしも捉われなかった。そして、いつも深く天下国家のことを思っては、いきどおりなげいていた。

彼はいつも、くりかえしこのように話していた。

「士たるものは天下の憂いに先だって憂へ、天下の樂しみに後れて樂しむべきである」と。

天子に仕える高貴の人にたいしても、みずから信ずるところを貫き、利害によって心を動かされなかった。事を実行するにあたっては、かならずあらゆる手だてをつくし、

「わたしが、これからしようとする事は、このようなものだと明示し、成否のほどが予めわからなくて、たとえ聖人でも首をかしげるようなものでも、わたしは考えぬいたすえで、いい加減にしてはならない」と言っていた。

## 杜と 衍えん

わしらの知事さまだ

内命書を封還する

みだりに圭角を露わすな

目立とうとするな

信を人の腹中におく

紹興（浙江）の人。字は世昌、諡は正猷、大中祥符元年（一〇〇八）の進士。眞宗の地方官として勝れた治積をあげ、その獄訟の審は明快にして、神のごとしといわれ。仁宗の慶曆年間、召されて御史中丞、樞密使となり、韓琦・范仲淹らとともに、国政改革・綱紀肅正にはげんだ。同平章事（宰相）になったが、明党の争にまきこまれ、わずか七十日で罷免された。官は太子少師にいたり、封は祁国公とされる。身辺が比較的きれいで、名位爵祿にも恬淡、食事なども一麵一飯であったという。

九七八年——一〇五七年。享年八十。

## ○ わしらの知事さまだ

杜衍が執務するさまは、その性格がそのままであった。たとえば訴訟事件を裁いては、鋭い判断力を謳われたが、その前に徹底した調査を怠らなかつたので、難かしい事件でも明快にかたをつけ、人々から神わざだと感服された。

部下の提出した書類は、くわしく点検したが、少しも疲れたようすは見せなかつた。法規をつくる段になると、役人が不正を妨ぐ余地のないような、しっかりしたものをつくつた。人民に政府の措置を伝える場合には、要領をわかりやすく示したので、人民は安心してこれにしたがつた。

はじめ平遥（山西省祁県）にあつたとき、たまたま出張して他県へ行つた。ところが彼がいない間は、県民たちは訴訟をさしひかえ、彼の帰るのを待つて彼の裁きを受けるのを願つていたほどである。

乾州（陝西省乾県）の知事となつて、まだ一年にもならないのに、安撫使（路に置かれた監督官）が彼の善政を聞いて、彼を鳳翔県（陝西省鳳翔県）の知事に栄転させた。まもなく兩県の人民が、境界のところで口論した。

「わしらの知事さまだ。よくも奪つたな」

「なにをいうか。今はわしらの知事さまだ。お前らのものではないわい」

## ○ 内命書を封還する

仁宗の慶暦年間（一〇四一——一〇四九）のはじめ、西夏との戦いが長びき、このままでは人民は疲弊するので、仁宗は思いきって富弼、韓琦、范仲淹の三人を抜擢して要務を托した。この三人は覚悟を新たにして、庶政を刷新し、官規を厳正にしようとした。ところが、小人にして悪強い連中は、みな妨害した。この渦中であって、杜衍はこの三人を援護した。

杜衍の功績は、とかく能力のない者が、うまく立ちまわって仕進を求めていたのを、だんぜん抑制したことである。とかく大輿に手をまわして、仁宗を動かし、仁宗じきじきの内命書を出させても、かかる個人的な利益にもとづく請願は、どしどし握りつぶし、それが十数件もたまると、一括して仁宗に返上した。そして、内命書を出させた本人を呼び出し、その姑息な手段を詰責し、無能ぶりを数え立てたから、彼らは恥ずかしさにいたたまれず、泣きながら退出するほどであった。その徹底したやりかたに、仁宗をあきれて、諫官の歐陽脩にこぼした。

「杜衍が封も切らずに、わしの内命書をつかえすのは、そなたも知っていよう。実はわしの恩命を求めて来る者は、もっと沢山いるのだ。杜衍が承知しないと思つて、彼らに因果をふくめて、あきらめさせている件数は、杜衍が突つかえて来たものよりも、もっとずっと多いのだ。杜衍の剛直さが、知らずのうちに、わしを助けているともいえよう。このことは、そなたも杜衍も、誰も知らないことなのだ」

しかしながら、杜衍のこうしたやりかたは、とつぜん小人どもの恨みを買った。彼らは、たまたま杜衍の婿が、公

金をもって遊宴したことを知ると、これを弾劾して投獄し、連座するもの十余人、杜衍も宰相の地位を逐われた。韓琦も地方官になることを願って都を出、富弼も同時に退けられた。

(注) 小人どもは、この疑獄を「一網打尽いちちうだじん」といった。「一網打尽」の語源はここにある。

## ○ みだりに圭角を露わすな

杜衍とえんの門生で、県知事に任命された者があった。杜衍は、その門生を呼んで、こう言い聞かせた。

「おまえの器量では、県知事くらいでは役不足であろう。しかし、くれぐれも才能をつつみかくして、鋭気をあらわさぬようにせよ。辛抱して人と協調し、円満にやることだ。そうでないと、ろくな結果にはならないぞ」

その門生は、げげんな顔で質問した。

「先生は、いつも剛直にふるまって来られたから、天下に重きをなす身になられたのでしょうか。それなのに、反対のことを教えられるのは何故でしょう」

「わしは、官歴も長いし、年もとっている。こうした経験が、しだいに認められて、陛下からも、朝野からも信望を得たのだ。だからこそ、自分の信念を、ようやく發揮できるようになったのだ、しかし、おまえの場合は、まだ県知事になったばかりで、今後の昇進は上司かみ(路の役員たち)のさじ加減にかかっている。その上司に好感を得ないで、

どうして州知事などに栄進できようか。いたづらに動きまわることは、禍いを招くだけなのだ。わしは、おまえの將來を思えばこそ、しばらく隠忍して目立たぬように心がけ、中傷をこうむらぬようにと望んでやまないのだ」と。  
『中庸』に、「隠れたるより見<sup>あら</sup>わるるはなし」とあるが、この話は杜衍の経験にもとづく、老練な考え方がにじみ出ている。）

(注)良<sup>りょう</sup>二千石<sup>せき</sup>

善良な地方長官のこと。漢代、一郡の大守の年俸が、二千石であったからいう。「<sup>かんじょ</sup>漢書」宣帝紀に、「我と此を共にする者、其れ推<sup>ただ</sup>、良二千石<sup>せき</sup>か」と。

## ○ 目立つは災いのもと

杜衍は、あるとき門生に、こう教えた。

「官途に就いたならば、とにかく清廉に、かつ慎重にふるまうように。存在を知られようとして、いたづらに手腕を揮つてはならぬ。少し目立つと、悪辣な同僚がいて、さまざま手で中傷する。上司だとて、人を見抜く力のあるやつは稀だから、たいていその中傷を受け入れて、おまえを左遷してしまう。だから、ゆったりと構えて、だまって仕事をしていればいい。心にやましいことがなければ、それでいいのだ」

## ○ 信を人の腹中におく

韓琦（魏国侯）が、こう述懐したことがある。

「杜衍は、まことに公正な人で、人の善事を心から喜ぶ風があった。また、人を見ぬく明識があり、ひとたび人を知れば、信任して疑わなかった。わたくしが枢密院の次官であった時、一、二の問題について、強硬に杜衍とやりあった。杜衍は不気嫌になったが、やがて諒解してくれた。それから後というものは、役人が案件を持参すると、『韓琦が目を通したかどうか』と聞いて、『韓琦が目を通してあれば持つて来い。直ちに署名しよう』といった。そこで、わたくしを精勵して、少しのことでも、ゆるがせにしなかった。これを以ても杜衍が、いかに公正な人であるか、自分の意見を無理に押しつけず、信を人の腹中におく人であることがわかる。まことの賢人というものであろう」

蘇そ 洵じゅん

賈誼でも敵うまい

厚葬は道にあらず

弁姦論を著わす

人情にもとるは奸臣なり

眉山びざんの人で。字は明允めいよくん、号は老泉。初め書を読まなかったが、年二十七、発憤して修業し、ついに六經百家の説に通じた。歐陽修に文才を認められて知遇を得、特命仕用で秘書省校書郎に起用され、姚闡とともに礼書を修め、勅撰の『太常因華礼』(宮廷の儀式次第)全百巻を作った。その子の蘇軾そしやく・蘇轍そてつとともに文名高く、世に「三蘇」と呼ばれて重んぜられた。彼は蘇軾らの父であることから、「老蘇」とも稱せられている。

一〇〇九年——一〇六六年。享年五十七。

### ○ 賈誼でも敵うまい

蘇洵が世に出ることができたのは、彼が著わした『權書衡論』(全二十二篇)が、歐陽修(時に翰林学士)に認められたからである。歐陽修は、蘇洵を荀子(戦国時代の思想家)の再来と激賞し、その書を時の宰相・韓琦に献じた。これによって彼の評判は世に高く、人々は争って彼の文章を愛誦するに至った。その影響するところ、当時の文章表現在一変したほどであった。

ある時、宰相の韓琦が、蘇洵を呼んで人物論をたたかわせたが、後でつくづく述壊した。「漢の賈誼ほどの学者でも、蘇洵にはかなうまい」と。

## ○ 厚葬は道にあらず

仁宗が崩御して、その陵をどの程度のものにするかについて、先例があいまいであったから、いろいろ議論があった。韓琦はその責任者に任命されて、彼は盛大に造営せよと主張し、資材や労役を各州にきびしく割当てたので、各州は騒然となった。

この時、蘇洵は、華元（春秋時代、宋の文公に仕えた臣僚。文公の葬儀を盛大に営んで、奢侈に過ぎたと評された）の不臣の例を引いて、厚葬は道にあらずと、韓琦に苦言を呈した。韓琦は、よけいな差し出口だと腹を立てたが、しかし、蘇洵の諫書が節道が通っているので、その意見を認めざるを得ず、過大な負担を各州にかけるのをやめた。蘇洵が病没すると、韓琦は生前の蘇洵を十分に処遇してやらなかったことをくやみ、詩を作って彼をいたんだ。その詩には、このような句があった。

賢を知ること早からず

媿（恥） 余（余）より先なる者なし

## ○ 弁姦論を著わす

嘉祐<sup>か</sup>の初年、王安石が世間の注目をあびて登場し、明党を結んでその勢力が政界を傾けるようになった。歐陽修も彼を支持し、蘇洵にたいしても彼と交遊を結ぶように勤めた。しかし蘇洵は、王安石を相手にしなかった。そして、「わたしは王安石の人物を見すかしている。彼は人情に欠けている男であるから、こういう男は世の禍いとならぬ例は少ない」といった。

王安石の母が亡くなって、士大夫がこぞって弔問に出かけた時も、蘇洵はひとり行こうとしなかったばかりか、「弁姦論」を著わして、王安石にたいする非難の口火をきった。蘇洵が病没して三年後、王安石は国政を独り占めにし、その無理が噴出して、はたして蘇洵の危惧したとおりになった。

## ○ 人情にもとるは奸臣なり

蘇洵の「弁奸論」の主旨は、こうである。

「当代においても、口先では孔子・老子の言を唱えながら、実体は野蠻人なみの行為に出ている者がいる。彼は名誉欲にこり固まった者や、不平分子を集めてはデマをまき散らして、我れこそは願淵・孟子の再来であるとの評判を立

てている。その陰険で悪らつなことは、他に例を見ないほどである。西晋の王衍おうえん、唐の盧杞ろきのような奸臣が、合わさったほどの悪さである。その弊害は、はかり知れないくらい大きい。

人たるものは、顔の汚れを洗うことを忘れない。これが自然の情である。ところが当代においてはそうではない。夷狄いじくの服装で、犬や豚並みの食事をし、囚人のような顔つきで、詩文を論じているありさまである。いったいこれが人の情であろうか。人の情に欠けるものは、かならずや大悪人に違いない。しかしながら、嘘でかためた世の評判を利用して、その腹黒さを押しつつんでいれば、良い政治を心がける君主、人材を大切にする大臣であっても、つい登用する気になるに違いない。天下を混乱に陥れることは必至であるのに、疑うものがないのは、わたくしの深く憂うところである。その弊害は、王衍・盧杞の比ではないのに」と

こうして蘇洵は、口を極わめて王安石が人情にもとるところの、危険な人物であることを訴えたのである。